

平成27年度 第9回（震災後第61回）
陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「健康総合計画（仮称）における地区別計画について」

日時：平成27年12月18日（金）13：30～15：30

場所：陸前高田市役所 4号棟第6会議室

参加：26名 12団体

資料：下記にアップ

<http://www.koshu-eisei.net/saigai/rikuzentakatakaigi.html>

1. 挨拶

伊藤健康推進課長

本日は、ことし最後の未来図会議である。今回は総合健康計画の中の地域づくりの視点について、皆さんのお知恵を拝借したいと考えている。活発な議論をお願いしたい。

2. 報告・協議内容

(1) 健康総合計画（仮称）の枠組と策定スケジュールについて

・陸前高田市 健康推進課 課長補佐 尾形良一

(2) 健康総合計画（仮称）の地区別（8町）の計画（たたき案）について

・陸前高田市 健康推進課 保健師

・8町別のたたき案について意見交換（※2015年の活動状況の情報交換兼ねる）

尾形健康推進課長補佐

本日は、健康増進計画の中の「地区別計画」の話をしていただき、それを健康増進計画に盛り込み、年明けに行うパブリックコメントへ向けての準備を進め、今年度内に市の健康総合計画（仮称）策定につなげたいと考えている。よろしくをお願いしたい。

ヘルスプロモーション推進センター 岩室紳也氏：

今回つくる計画は、あえて8地区別をつくることにした。地区別計画をどのように活用するかという視点で、皆さんに見ていただきたい。見開き2ページの地区別計画をつくり、各地区に配り、保健推進員や住民が年に何度かこれを見合わせて、ここがよくなった、こんな問題も出てきたが次の計画で生かそうという、一つの目安になればと考えている。

陸前高田市 健康推進課 保健師 千葉春香氏：気仙町

①社会参加で元気づくり。年に1度けんか七夕祭りを開催しており、地域の結束力が強い。サロンは参加者が多く継続性がある。出前講座や健康教室は男性の参加も多い。

②お互いさまで健康づくり。近隣住民が集まり、お茶っこ飲み会を実施している。集う機会がなくても近隣で互いに声をかけ合っているため、見守り体制がしっかりしている。

③はまってけらいん、かだつてけらいんについて、健康教室の依頼が震災後ゼロ件だが、集う機会はそれぞれつくっている。「はまかだをする機会があっても、高齢者は足が悪くて近くの公民館に行くことが大変」という方もいる。

④誰もが健康になるまちづくりでは、仮設住宅等の狭い環境での生活により、運動不足が顕著に出ている。「沿岸の平らな道路は被災し、国道も工事車両が出入りしているため散歩もできない」という声もある。

⑤子どもを産み育てやすい、子どもが元気なまちづくりについて、子供の出生数が減少しており同居率が高い。親が知らない間に甘いお菓子を与えている祖父母も多いもよう。また、公園などの子供の遊び場が少ない。

⑥住民と創る医療では、町内に医療機関がなく、足がない高齢者は通院するのが困難である。その中で市内の医療機関のほかに、気仙沼の医療機関に通院する人も多い。県立高田病院の健康講演会が年1回開催されているが、女性より男性が多く集まっている。

市民：

祖父母の話の中で、甘いお菓子を与えているのではないかということの根拠はあるのか。

陸前高田市 健康推進課 保健師 千葉春香氏：

気仙町に限らず、健診の場でお母さんと話をすると、目の届かないところで甘いお菓子を内緒で与えているようだと話を聞くことがあるため、このように表現している。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

住民全体にアンケート調査を行っていないため、実態確認はできていないのが現状である。評価や確認という意味で、次回以降に反映していきたい。

陸前高田市 健康推進課 保健師 佐藤沙希氏：横田町

①保健推進員が自主的に集まり会議や研修会を開催するなど自立度が高く、参加率もほぼ100%である。一方で地元住民同士、仮設住民同士の交流はあるが、地元住民と仮設住民の交流は余りなく、仮設住民から「地域との温度差や知り合いが少ない」などの声がある。

②昔ながらのつながりが強い。健康教室へ参加する人がとても多く真面目。地域にどのような人が暮らしているか住民同士が把握し、見守り体制ができている。

③横田コミセンで社会福祉協議会主催のサロンを開催しており、予防医学協会も健康相談に入っている。横田小、横田中仮設の近くのコミセンが集まりの拠点となっている。

④地域ケア会議に参加して、地域に共通する課題を明らかにし、課題解決に必要な支援や仕組みの開発、地域づくりを目指している。

⑤公園や子育て支援センターの拠点がなく、最寄りの遊び場は竹駒町になっている。子育て家庭同士のつながりが少なく、孤立した育児環境に置かれている可能性がある。祖父母と

同居している家庭が多いことから、間食、食習慣の乱れが予測され、将来的に子供の肥満や生活習慣病につながらなければいい。

⑥診療所、薬局、歯科医院等の医療機関がないので、住田町の病院に通院している人も多い。医療費が低いことから、病院に受診できていない人も多いのではないかと。

復興支援連絡会 :

横田の仮設に住んでいる方は、横田町に残らない。「地域の人と密接になっても、次にどこに行くかわからないため、入りづらい」とのこと。行事参加率では、仮設の人と地域の方の交流が全くないわけではなく、三日市工業団地仮設では地域の方と交流があり、生き生きと自分たちで企画して支援員に声をかけてくれることも多くなっている。

地域包括支援センター 佐藤咲恵氏 :

12月15日に4回目の地域ケア会議を行った。「会議に参加できない方の生の声を聞きたい」ということで、暮らしに関するアンケート調査を行うことになり、たたき台を作成。年明けに各戸配布して回収を行い、まとめは岩大と東北大の協力をいただき、3月までに冊子にして各戸配布する予定である。これを基礎資料として困り事を解決に結びつけるという動きがある。

陸前高田市 健康推進課 保健師 佐藤沙希氏 : 米崎町

①米崎中仮設では住民が「健康づくり隊」を結成し、健康づくりに関する教室などを開催している。講師依頼から教室の開催、運営まで住民で行っている。朝日のあたる家などで住民同士の交流はある一方、津波被害を受けていない人や自力再建した人の中に、仮設で暮らす人たちに遠慮してサロン等の集まりに参加できないという声がある。

②健康教室の開催回数が市内で一番多い。地域独自で健康づくりを目的とした活動も展開している。参加者も比較的多い地域である。

③はまかだの必要性を感じている人がおり、住民みずからお茶飲み会を開催している。

④国道45号やアップルロード沿いに多くの店舗が建ち並んでおり、買い物へのアクセスは良好。公共交通機関としてBRTや路線バスもある。

⑤出生数が市内で一番多い。保健師のフォロー件数も多い。子供を連れて遊びに行ける場所や育児用品を買う場所がないなど、育児に適した環境は整えられていない。

⑥県立高田病院や歯科診療所など医療機関が多い。朝日のあたる家では、情報交換会や勉強会も行われており、認知症カフェ、被災した子供のグリーフサポートも開かれている。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏 :

米崎町も震災後、町の形が変わってきた地区だと思うが、いかがか。いろいろな社会参加活動を仕掛けている人がいるのが特徴である。

陸前高田市 健康推進課 保健師 村上有紗氏 : 竹駒町

①五年祭があるが、年々参加者が減少し、梯子虎舞の後継者の確保が困難になっている。サロンや一本松クラブの活動が活発で大勢参加している。各地域で毎月定例会を行っており男性の参加も多い。

②毎月の定例会と同時開催の健康教室が多くある。買い物や病院受診など医療手段のない方が、車を運転できる住民の方と乗り合いをして生活を支え合っている。

③サロンや一本松クラブが活発なので、はまかだをする機会はしっかりある。仮設住宅ではスーパーまで運動を兼ねて、みんなでシルバーカーを押しながら歩いている。

④町内のスーパーが減塩活動を行っている。住民の健康意識向上に効果があると思っており、この運動が他の民間企業にも普及すると、健康意識の向上が加速すると感じている。

⑤祖父母、曾祖父母と同居している子育て世帯が多く、祖父母世代への育児の正しい知識を習得してもらう必要がある。高田県立病院にしか小児科がないため不便。

⑥竹駒町はBRTや県交通も通っているが、それだけではなく、親戚やご近所の方々に車に乗せてもらい病院受診をしているという支え合いの声が多く聞かれる。

陸前高田市 健康推進課 保健師 高橋成美氏：広田町

①祭りは根岬の梯子虎舞、広田町全体の五年祭、大漁祭りがある。海の仕事に携わる方が多い。2カ所の仮設住宅があり、社協サロンを開催している。

②他町と比較し保健推進員や健康教室の開催は少ないが、成人教室などの出席者が多く、若い方の出席率も高い。地域のつながりは強い。

③近隣同士で井戸端会議やお茶っこ飲みなどを行っている。黒崎温泉に通い、話をしてくるという高齢者もよくいる。

④「病院等までの移動手段がなく不便」「主要道路が狭く、復興で工事車両も多く走っているため、出歩くには危険で散歩もできない」という声をよく聞く。

⑤震災後の出生数が1番になった年もある。赤ちゃん訪問に行くと、第3子、第4子出産という家庭も多く、同居あるいは近隣に両親が住んでいる家庭がほとんど。乳幼児を持つ保護者の集まる場として「子育て支援センターにこここ」を利用している方が多い。

⑥広田診療所に通院・往診を利用している方が多いが、高田病院まで足を延ばしている方も多い。歯医者は、震災前に町内にあった広田歯科医院、小友町の歯科クリニックに通院している方が多い。大船渡病院まで行く手段が少ないという声がよく聞かれる。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

指摘のとおり、実はいろいろな活動がされているものと重複させて見ていく必要がある。

陸前高田市 健康推進課 保健師 千葉春香氏：小友町

①イベントの参加は女性が多い。

②自力再建によって世帯数や人口が急増しており、コミュニティの再構築が課題である。

③西下公営住宅では共同で畑づくりをしている。震災以後、健康教室は小友町の全行政区をまとめて開催している。

④足腰が悪く運動がしにくくなっている。サロンやお茶っこ飲みでは、甘いお菓子や漬け物を持ち寄っている。歯科に関する健康教室を祖父母対象に開いたが、虫歯菌がうつるといふ話をしたときに驚いていた。知識が不足している印象がある。

⑤子供の出生数は横ばいだが、世帯数が増加していることもあり、ふえている印象。箱根山のわんぱくの森で親子が遊ぶ姿をよく見る。

⑥町内に医療機関1カ所、薬局1カ所、歯科医療機関が1カ所あり、通院しやすい。また、女性の栄養、食に対する意識が高く、栄養教室の依頼が来ている。

陸前高田市 健康推進課 保健師 村上有紗：高田町

①下和野公営住宅では自治会長と区長が協力して、コミュニティづくりのために活動している。うごく七夕があり、震災後は規模が縮小しているが、おはやしの練習や山車のお飾り作製など準備段階から盛り上がっている。

②下和野公営住宅に「はまらっせん農園」があり、住民の貴重な交流の場となっている。住まいが変わる移行期に入ったが、仮設住宅に入居したときの勢いがいないため、新しい地域に溶け込みづらい状態であると思う。

③下和野公営住宅の交流プラザやはまらっせん農園が、はまかだの場となっており、他の災害公営住宅にも普及していくといいと思う。

④旧市内のかさ上げ工事が進んでいるため、平たんな場所が少なく外出が難しい。健康に関する情報を発信している「りくカフェ」さんが内科医院と歯科医院の敷地内で活動しており、住民の健康意識の向上につながっている。

⑤祖父母、曾祖父母と同居している子供が大変多いことから、子育ての正しい知識を習得してもらう必要がある。

⑥親戚や近所の方に車に乗せてもらい、受診している方が多い。

市民：

下和野の交流プラザでは、子供たちが帰ってくると「ただいま」と言って交流プラザで過ごしているという話を聞いた。公営住宅の中に、子供が行ける安心な場所があることがいい。

陸前高田市 健康推進課 保健師 高橋成美氏：矢作町

①人口は震災直後に増加したが、その後は減少している。矢作町は生出地区、二又地区、下矢作地区の3つのコミュニティに分けられ、それぞれの地区で特徴が異なる。健康教室や栄養教室、高齢者教室も3つの地区ごとに頻繁に開催されている。

②保健推進員による健康教室が盛んに行われており、お互いが近所に声をかけ合って健康教室に参加しているため参加者は多い。仮設住宅は矢作町で被災した方だけではなく、気仙町から避難された方も多い。

③仕事中や散歩中にも隣同士や道行く人と気軽に会話していると保健推進員から話があった。見守り、支え合いができています。

④高田病院や大船渡病院に行く際の交通手段に困っている方が多くいる。

⑤26年の出生数は2名。今年は現時点で5名生まれているが、出生数は減少して1桁台まで落ちている。子育て支援センターが町内になく、お母さんたちが気軽に遊びに行ける場が少ない。子育て世帯は同居している世帯が多い。

⑥二又診療所では患者輸送バスを3方向に曜日を決めて出しており、毎回必ず利用者がいる。介護予防教室や高齢者教室が頻繁に開催されており参加者もとても多い。

ヘルスプロモーション推進センター 岩室紳也氏：

貴重な意見をたくさんいただいた。いろいろな人たちを健康づくりの輪に巻き込む手段の一つとして計画を育てていきたい。

3. その他連絡・アナウンス

地域包括支援センター 佐藤咲恵氏：

来週の水曜日、認知症予防の研修会がある。「世界一受けたい授業」などに出ている先生が来るので参加してほしい。チラシが必要な方はお持ち帰りいただきたい。

復興支援連絡会 島倉友也氏：

復興支援連絡会の15日発行の「おはようさん」を今月も発行した。ごらんになっていたきたい。

◇次回：平成28年1月22日（金）

メインテーマ：（仮）健康総合計画（仮称）にかかるパブリックコメントについて

会場：市役所第4号棟第6会議室